近世・近代における中国俗文学的形式の受容

羅工洙*
gsna@ynu.ac.kr

Contents

1. はじめに
2.「章回」の回目と関連語など
3. 物語の「結びの常套語」
4. おわりに

Abstract

本稿では、日本の文学にそのまま取り入れられた中国俗文学の形式について考察した。特に、「回目」という小説の始まりの部分と「章回」の終りの部分に注目した。

中国俗文学の大きな特徴は「章回小説」である。「章回」というのは、各小説の目次が「章」や「回」になっていることである。この「章回小説」は、日本には中世までは中国俗文学のようなものはなかった。中国では「卷」のものもあるが、時代の流れにより「回」や「章」になっているものが増えていく。さらに「回目」(目次)のように、二行からなる目次が流行する。こういうスタイルが日本にも伝えられ、読本、通俗和訳本、日本人作白話文、漢文戯作の一部、明治期の文学にも影響を及ぼしている。「回」そのものは、言文一致の創始期の作品にも現われているが、二行の「回目」は用いられなくなる。さらに、「章回」の話の導入部に「話説・却説・閑話休題」のような話題転換語も多数用いられ、中国俗文学の体裁を帯びている作品が多く見られる。

中国俗文学における「章回」の終りの部分には「結びの常套語」が用いられる。これは、一般的には「畢竟」を伴いつつ「且聴下回分解」をもって結ぶという形式である。「且つ下回の分解を聴け」の意味で、また次の話が続くことを語り手が示す方法である。日本の文学にもそのまま受入れられて、近世の読本、極一部の通俗和訳本、日本人作白話文、明治期の漢文小説の一部にも用いられているが、特に、明治期の翻訳・政治・講談などの文学作品に多数用いられている。明治期の場合は20年代以前の作品に集中していて、「且聴下回分解」のような原形を保っているものもあれば、「看官」「次回」「次卷」「次編」のような指標を用いる場合も多い。

このように、中国俗文学の形式をそのまま日本文学に導入している作品が多く、中国俗

* 嶺南大学校 日語日文学科 副教授

교보문고 KYOBO Book Centre

文学が近世や近代の日本文学に影響を及ぼしていることが分かった。しかし、日本における「章回」小説の「回目」や「結びの常套語」は、言文一致の創始期である明治20年代以後は特殊な資料以外には用いられなくなり、一時的な流行であったことがわかる。

Key Words：中国俗文学(Chinese Literature)、文学形式(Chinese Literary Form)、回目(Content)、結びの常套語(Closing remarks)

1. はじめに

近世や近代の日本文学には、中国俗語(白話語彙ともいうが、以下中国俗語に統一する)が散見される。近世の学問の主流は漢学であるが、清国との交流により「唐話学」が盛んになり、オランダとの交流により「蘭学」が盛んになった。特に、近世や近代の文学を考察する際、「唐話学」の影響を考えるべきである。当時、物品の往来のみならず書籍も多く流入し、知識人に広まることによって、言葉だけではなく文学にも関心を寄せていったのである[1)]。中国俗文学により、新しく読本が生れたことなど文学の面では多く研究されている[2)]が、語学の面においては唐話辞書の影響関係の他にはそれほど注目を浴びていない。筆者は、中国語が日本語に及ぼした影響について漢字表記を中心に考察しているところであるが、今回は中国俗文学(白話文学ともいうが、以下中国俗文学に統一する)の形式が日本文学にどのように現われているのかを見てみたい。つまり、日本で中国の俗文学の形式を模倣しているような体裁がどのように反映されているのかについて考察したのである。その形式については、大木康[3)]により「中国白話小説の形式的特徴」という小項目で言及されたことがある。

大木は、中国俗文学の形式的特徴として以下の四点を挙げている。

① 各章が「回」によって区切られること。

1) 石崎又造(1967) 近世日本に於ける支那俗語文学史 清水弘文堂、p.全.
2) 中村幸彦(1984)「水滸伝と近世文学」 中村幸彦著作集 第7巻、中央公論社、pp.214-268. 徳田 武(1977)「読本と中国白話小説」『江戸文学と中国』 毎日新聞社、pp.55-76.
3) 大木康(2009)「馮夢竜『三言』から上田秋成『雨月物語』へ―語り物と読み物をめぐって」『文学』第10巻1号、岩波書店、pp.151-156.

교보문고 KYOBO Book Centre

② 話の冒頭に「入話」が置かれること。
③ 文中で詩詞等韻文が用いられること。
④ 中国白話小説は、講釈師が物語の語り手になっており、その語り手が作品の中に直接顔を出す場面があること。

大木は四つの形式を取上げているが、「浮世物語」を主対象とし、時には「英草紙」のみを対象としているので、近世や近代の全般的な傾向が分からない。大木の論文のタイトルからも分かるように、「雨月物語」(明和5年)までと資料を限定してしまったことに原因があると思われる。ここでは、資料の幅を大幅に広げ、どのように用いられていたのかを具体的に検証してみたい。

本稿では、①②③④のうち、②③のように話の展開を前もって説明するとか文中に詩が入っているとかいうことは文学的要素が強く、特にこれといった言語的特徴が見られないので、考察の対象から外すことにする。②の場合については、「漢語大詞典」によると「引子」の③のところに、「古典小説的開端部分。或用詩詞、或用小故事、以引出正文。話本引子称為“入話”、一般也叫“楔子”。胡適≪中国章回小説考・≪紅楼夢≫的凡例≫:“‘此書開巻第一回也’以下一長段、在脂本里、明是第一回之前的引子。”」とあり、「入話」とは各「章回」ごとの冒頭部分に挿入された部分で、いわば発端である。

ここでは①と④に関連し、言語的特徴として変化が殆んどなく中国俗文学の影響を受けたと思われるものとして、中国俗文学に見られるような言語的な要素について見ていきたい。

近世や近代の文学作品には、本文中に中国俗語と思われる漢字表記が見られる。例えば、指示・疑問代名詞の場合、「這辺・那辺」「這里・那里」「甚麽・什麽」[4]の例は、普通は漢字表記として現われていないが、作品によっては多数現われることもある。これにあたる一般的な漢字表記は、「彼処・彼所、此処・此所」「彼方

4) 羅工洙(2006a)「日本における中国語指示代名詞「這辺・那辺」」「日本語学研究」第17輯、韓国日本語学会、pp.9-32.
_____(2007)「日本における中国語指示代名詞「這里・那里」」「東亜人文学」第11輯、東亜人文学会、p.141-177.
_____(2008a)「日本における中国語の疑問代名詞「甚麽・什麽」について」「日本近代学研究」第21輯、韓国日本近代学会、pp.5-35.

교보문고 KYOBO Book Centre

・彼辺、此方・此辺」「如何」などである。このように、普通の漢字や漢語があるにもかかわらず、中国俗文学に用いられる語を用いたことは、近代は英学の時代でありながらも、いわば「唐話学」の影響があったことを物語っている。

本稿で取上げる中国俗文学の形式的特徴である言語的形式を明らかにすれば、文学そのものの影響だけではなく、漢字表現の多様性にも影響したことが分かるだろう。

2.「章回」の回目と関連語など

中国俗文学、特に小説は、目次が「章」とか「回」になっている。つまり、数字をつけて「一章、二章」「一回、二回」の順序で話が展開する。「漢語大詞典」は、この「章回」について次のような記述がある。

> 【章回】“章”和“回”。我国長篇小説的一種段落形式。魯迅≪中国小説史略≫第13篇:“≪大唐三蔵取経詩話≫……三巻、分十七章。今所見小説之分章回者始此。”参見“章回小説”
>
> 【章回小説】以章回分段叙事的長篇小説。毎回常用両句相対仗的句子標目、以掲示本回的主要内容。其源出宋元話本、后為古典長篇小説的主要形式。魯迅≪集外集拾遺補編・<某報剪注>按語≫:“我到上海后、所惊導的事情之一是新聞記事的章回小説化。”

「章」と「回」は同じもので、中国の長編小説に用いられる一種の段落形式のことである。魯迅の作品である「大唐三蔵取経詩話」(「西遊記」の元になった説話)を取上げ、ここから「章回」小説が始まると述べている。「章回小説」の欄には、「叙事的長篇小説の分段の役割で、毎回常用する文を分ける表示」であり、宋元以後の古典長篇小説の主要形式であるとの記述がある。やはり魯迅の作品の例を挙げている。主に話本に用いられるもので、いわば中国俗文学で用いられるものであることが分かる。

교보문고 KYOBO Book Centre

〔章回小説〕〔章回体〕(回数を分けて記述する文体)の長篇小説:旧時の白話小説はすべてこの式による。〔話本〕の発展したもの。 中日大辞典,

「中日大辞典」にも、簡単ではあるが「章回小説」について記されている。また、日本の「唐話辞書」である「訳通類略」(「小説套語」、明治年刊写本)にも紹介がある。

回 段ト云ココロ一段ト云コトヲ一回トイフ

普通は「段」というべきところを中国俗文学では「回」を用いるという。「訳通類略」では「回」を「小説套語」としていることから、常套的に使う語であることが分かる。では、実際、中国俗文学の目次にどのように現われているのかを調べてみよう。その資料としては「中国通俗小説総目提要」[5]がいいと思われる。目次の構成を見ると次のとおりである。

先ず、多用されている形式は、単独の「巻」、「巻」の次に下位分類として「回」を用いるもの(以下、「巻ー回」のように表記)と、単独の「回」である。中でも「十巻百回」のような形と「八十回」のような「回」のみの例が大部分を占めている。「章回小説」のタイトルにもなっている「章」の小説は意外と少ない。「章」の小説は25種しか見られなかった。ほかに極少数ではあるが、諸種の形が見られるので、ここに紹介しておく。

「巻ー節」1、「巻ー段」3、「巻ー章」1、「集」6、「集ー回」9、「集ー章」1、「段」1、「則」1、「節」3、「章ー節」1、「編」1、「編ー回」17種がそれである。このことから、中国俗文学の形は、単独の「巻」、「巻ー回」、単独の「回」が主たるもので、「章」はそう多くなかったことが分かった。参考までに、近世日本の知識人に多く読まれたもののうち、もっとも人気のあった「四大奇書」や「紅楼夢」は全て「回」になっている。

では、近世や近代の日本の文学にはどう現われているのだろうか。近世の資料は、「巻」、「上巻」、「巻第一」、「巻之一」のように殆んどが「巻」になっている。大木が指摘した「英草紙」「繁野話」「雨月物語」も「巻」になっている。しかし、「巻」に

5) 江蘇省社会科学院(1990)『中国通俗小説総目提要』中国文聯出版公社、全.

교보문고 KYOBO Book Centre

なっているからといって中国俗文学の影響を受けていないかといえば必ずしもそうではない。「巻」そのものは、近世以前の作品にも多数現われている。ここで注目したいのは「章回」のことであるので、これに注目しようと思う。「水滸伝」の影響を受けたとする「南総里見八犬伝」（文化14ー天保13、1814ー1842）も「第九輯巻之五十三下」で終るので、形式から見ると中国俗文学の形とは異っているが、本文中における漢字表記は中国俗語がかなり散在している。馬琴の他の作品「小説比翼文」（享和4年）には、「第七編」という「編」の構成もある。他に、「椿説弓張月」（文化4年）などは「巻」の構成になっている。

その他の読本を見ると、「復讐奇談七里浜」（一渓庵主人、文化5年）の場合は、「上・下巻ー第十回」になっている。「復仇女実語教」（十返舎一九、文化6年）は、「上・下編ー第7章」で、「章」の例も見られる。

通俗和訳本の例をみよう。「近世白話小説翻訳集」に収められている、「通俗忠義水滸伝」「通俗西遊記」など殆んどが「巻」で構成されているが、「通俗平妖伝」（享和2年）は「第二十四回」、「通俗繡像新裁綺史」（寛政11年）の場合は「第八回」になっている。多くはないが、通俗和訳本にも「回」の例が見られた。

また、中国俗文学の体裁で構成されている日本人作白話文学にも少々見られる。「演義侠妓伝」（烏有道人、刊行年刊未詳）は「二回」、「太平記演義」（岡島冠山、享保4）は「巻之五ー三十回」、「忠臣水滸伝」（山東京伝、寛政11年）は「前後編ー十一回」になっている。日本の浄瑠璃を中国俗文にした「海外奇談」[6]は、「十回」になっている。このように。日本人作白話文学にも見られるが、やはりそう多くはない。

「江戸繁昌記」のような「繁昌記」類は殆んどが「巻」になっていて、その他の大部分は「編」の構成になっている。明治期になって、「情天比翼縁」（三木愛花、明治17年「十回」）や「新橋八景佳話」（明治16年、「八回」）に「回」の例が見られる。

近世日本における「章回小説」の体制は、全体的に見れば近世中盤から整うようになるが、種々のジャンルに浸透はしているものの、積極的に受入れられていたとはいいにくい面がある。では、近代の日本文学にはどのように現われている

6）香坂順一(1983)『白話語彙の研究』光生舘、p.438.

교보문고 KYOBO Book Centre

のかを見てみよう。近代の文学といってもほぼ明治期に限られており、それも明治初期の作品に集中している。「章回」となっている作品は相当多いので、幾つかだけを提示することにする。明治文学には、翻訳小説や政治小説、講談類、その他多種ある。翻訳小説の代表格である「欧州奇事花柳春話」（明治11年）は「四編六十六章」で、その付録は「十一章」の「章」の形式である。「魯国奇聞花心蝶思録」（明治16年）は、「第十三章」の「章」である。「新説八十日世界一周」（明治11年）は「第三七回」、「罪と罰」（明治25年）は「第二四回」の「回」の形式である。翻訳小説の場合は「章回小説」の形が多く、それ以外は「巻」やただの「数字」「無表」のものもある。

政治小説の場合、「汗血千里の駒」（明治16年）は「第六四回」、「雪中梅」（明治19年）は「上中下編」にそれぞれ「七、八、八回」など他の形式もあるが、「回」の方が多い。「情海波瀾」（明治13年）のように、劇的な要素を持っていることから、「第五駒」のような「駒」になっている例もあるが特殊である。

講談類の代表格である「牡丹灯籠」（明治17年）は「第十三編二一回」、「天保六花撰」（明治25年）は「第二十回」になっていて「回」が中心であるが、「席一回」、「巻一回」の形もある。

普通の文学にも「回」の小説は広まっている。「世路日記」（明治17年）は「上下編三七回」、言文一致の嚆矢である二葉亭四迷の「浮雲」（明治20年）は「三編一九回」の構成である。他に、山田美妙とか幸田露伴、斎藤緑雨、嵯峨の屋おむろ、広津柳浪などの言文一致発生期の作品には、「回」の形が多い。

このことから、明治期に入ってからは「章回」の形がかなり広い範囲に広まっていることが分かる。但し、中心は「回」であり、明治期20年代の初めごろまでは流行しているが、時代がくだるにつれて段々用いられなくなる。

近世に読まれた代表的な中国俗文学でる「水滸伝」「西遊記」「三国志」「金瓶梅」「紅楼夢」の例を提示してみよう。便宜上、最初の「一回」のみを見ることにする。

水滸伝　第一回　張天師祈穰瘟疫　洪大尉誤走妖魔
西遊記　第一回　霊根育孕源流出　心性修持大道生
三国志　第一回　宴桃園豪傑三結義　斬黄巾英雄首立功

교보문고 KYOBO Book Centre

金瓶梅,　第一回　西門慶熟結十兄弟　武二郎冷遇親哥嫂
紅楼夢,　第一回　甄士隠夢幻識痛霊　賈雨村風塵懐閨秀

二行になっているこの「回目」は、その「回」の中身の要約的な意味を持っている。中国俗文学の小説や戯曲には、このような形を取ってその回の全体的な話の流れを要約し、間接的にその全体の内容を紹介するようにしている。ここでは主に登場人物の描写を入れてその状況を示しているが、それだけではなく隠喩的に表す場合もある。中国の小説類にはこのような要約が全ての作品に見られる。その大部分が「二行」で構成されているが、まれに「一行」のものもある。中国文学における「章回」の「二行」の導入部を表す確かな用語が見つからない。いわば、「回」ごとの「小題名」ともいうべきである。大木はこれに「回目」という用語を用いている。「日本国語大辞典」や「漢語大詞典」にも見あたらないが、大木と同様「回目」という用語を用いることにする。この「回目」は辞書には出てこないが、「高橋阿伝夜叉譚」(明治12年)にその端緒が見られる。「記者曰此冊子第三編下の巻は九回なるを繁机の麁漏過ツて其回目を脱し第四編上の巻を九回とせり」(明治文学全集2、p47)のように「回目」という用語を既に用いていたことがわかる。

近世や近代の日本文学にもそれ以前に見られなかった、上のような中国俗文学的な要素が見られる。読本の「八犬伝」の「巻之一第一回」の例を見よう。

季基訓を遺して節に死す
白龍雲を挾みて南に歸く

これと関連して「季基」が現われ死ぬ場面と、途中「白竜」が現われ活動する様子が詳細に描かれている。つまり、「回目」と同じように、内容が展開されるのである。「八犬伝」の全ての目次はこういう形になっている。また、馬琴の「椿説弓張月」や「近世説美少年録」(文正12ー天保3)などにも見られる。

馬琴以外の作品を見ると「復讐奇談七里浜」(一渓庵主人、十回本、文化5年)には、

교보문고 KYOBO Book Centre

第一回 暗夜に唐猫香器を奪ふ
身にかへていささか秋をおしみ見む
さらでももろき露の命を

とあり、目次の構成が少々特異である。「暗夜に唐猫香器を奪ふ」が一行になり、二行目と三行目はやや小文字で「短歌」の構成になっている。一行目が直接的な内容を暗示している反面、「短歌」のほうは、間接的で隠喩的な意味を含蓄している独特な組合せである。読本の最初の作品である「英草紙」「繁野話」「雨月物語」はこのような構成になっていない。近世後期の読本は大部分が「回目」の体裁になっている。

通俗和文体のものにも、中国俗文学の形式がそのまま受入れられている。「通俗水滸伝」「通俗西遊記」の場合、「回目」が原本通りである。やはり大部分の作品に「回目」が見られる。例えば、「通俗孝粛伝」（紀滝淵訳、明和5年）には、次のような例がある。

巻之一 第一段
第一回 東京城妖美看ニ灯籠ヲ一
後花園秀才遇ニ佳人一

劉真が科挙に臨もうとしたが、時間に遅れて試験を逃し、後に寺で勉強することになる。歳月は流れ、劉真はお金がなくなり市中を離れ、後花園で金魚が化けて妖精になった娘と出会うという話が展開する。つまり、要約された「回目」の内容通りに展開するのである。こういう形式は、「通俗和訳本」から見ると、近世の中盤あたりから広まって日本人の目に触れるようになったと思われる。「通俗繍像新裁綺史」（睡雲菴主訳、寛政11年）にはさらに、大木がいうような「入話・入詩」が多く含まれている。

次に、日本人作の白話文学は文が短いためか、「回」の例も少なく「回目」の例は、山東京伝の「忠臣水滸伝」（寛政11年）にのみ見られる。「江戸繁昌記」のような「繁昌記」類にもそのような特徴は見られない。但し、三木愛花の「情天比翼縁」

교보문고 KYOBO Book Centre

(明治17年)は、普通の漢文戯作と違って才子佳人の運命を描いた小説であるが、ここには、中国俗文学の体裁が綺麗に取入れられている。「情天比翼縁」の第五回までは二行の回目になっているが、六回から十回までは二行の「回目」なしに話が展開される。三木愛花の「新橋八景佳話」(明治16年)は、一行の「回目」である。「情天比翼縁」の例のみを提示しよう。

第一回　東台山才子遇ニ佳人一
　　墨陀堤老婆盟ニ秀才一

このような形になっていて、中国俗文学の体裁にしている。これは、近代の明治期にあたるものであるが、特に明治初期は近世文学の流れの延長線上にあることを物語っている。こういう現象は、明治初期文学の翻訳小説や政治小説、講談類などに多数現われている。明治期の資料はとても多いので、紙面の関係上、代表的な作品いくつかを提示するにとどめたい。

まず、翻訳ものの「花柳春話」の例を見よう。

第一章　猟夫亦能憐ニ窮鳥一
　　世人休レ疑李下冠

主人公マルツラバースが荒涼とした野原をさまよっていたとき、アリスの父である猟夫に助けられるが、そこには陰謀があって命を失うことになるわけである。中国俗文学のように、まるで漢詩文のような形をしている。「花柳春話」の場合は、漢字「七字」の二行形式である。しかし、「泰西活劇春窓綺話」(服部誠一、明治16年)は「八字」二行、「欧州情譜群芳綺話」(大久保勘三朗、明治15年)は「四字」二行、「欧州奇話寄想春史」(丹羽純一朗、明治12年)は「九字」二行形式であるので、多様な形をしていることが分かる。翻訳文学に現われる中国俗文的「回目」は、明治10年代に集中されており、20年代以後はあまり用いられなくなる。普通は二行であるので、それに固執したために、以下のような形も見られる。

교보문고 KYOBO Book Centre

第二回 寡婦孤兒(くわふみなしご)を携(たづさ)へ
て故山(ふるさと)に飄零(さまよ)ふ(明治初期翻訳文学選第二期)

上の例は、「政党余談春鶯転」(関直彦訳述、17年)のものである。これは、事実上一行であり、一行にしても構わないが、行を替えてまで二行にしようとする意図があったと思われる。

翻訳文学以外のものも、二行の形式を取っている。

①第一齣 万縷緑垂楊柳雨(ルヤウリウノアメ)
一枝紅破海棠春(ルカイドウノハル)(新日本古典文学大系明治編16)

②第一回 苦(かこくに)ニ苛酷(くるしんでお)ニ於初女脱(はつじよみを)レ身(だつし)
極(ちよくげんを)ニ直言(きはめてだんじうろうがいに)ニ団十郎遇(あふ)レ害(新日本古典文学大系明治編7)

③第一回 万緑枝頭(ニ)紅一点
動(スノ)レ人(ヲ)春色不レ須(ヒ)レ多(ヲ)(明治文学全集5)

①は最初の政治小説だと言われている「民権演義情海波瀾」(戸田欽堂、明治13年)、②は役者市川団十郎の返り討ちと小平治の亡霊になった玉猫の活躍などを繰り広げる「百猫伝」(桃川如燕、明治18年)、③は恋愛、立身出世をテーマにしている「惨風悲雨世路日記」(菊亭香水、明治15年)である。政治小説や講談類、一般小説にも中国俗文学の形式を取っている「回目」が多い。これは、翻訳小説と同様、明治10年代に流行っているが、20年代以後の作品には二行になっている「回目」は殆んど用いられなくなる。

ちなみに「章回小説」にまつわって一言言及すれば、この二行回目の後に本格的な話題が展開されるが、その用語の一つに話題転換語[7]がある。その代表的なものが「話説」「却説」「閑話休題」[8]であり、他にも実に色々のものがある。話題転

7) 話題転換語とは、すぐ前の話とは異り、新しく話が始まることを表す言葉である。
8) 羅工洙(2005)「日本における中国俗語的話題転換語「却説」」「日本語文学」第26輯、韓国日本語文学会、pp.41-66.

교보문고 KYOBO Book Centre

換語は普通、本文中に新しい話を展開するために用いるもので、「章回小説」では、「章」や「回」が換わるや否や用いる場合も多い。例えば、「水滸伝」の例を挙げてみよう。

第二回 王教頭私走延安府 九紋竜大闘史家村
話説到宋哲宗皇帝在時、其時去仁宗天子已遠、～

第一回の話が終り、第二回を展開するために、前回の話とは別の話を新しく始めることを暗示している。この話題転換語については前に考察したことがあるので、詳しくは述べないことにするが、「章回」が変るとき文章の冒頭で用いる場合も日本の文学に散見される。

第二四回 恨與(ミト)ニ積雪ニ滋深(ニシ)矣
憂似(ヒテ)ニ惨雲ニ凝(ニテ)未(ズ)レ(ダ)開(カ)
却説ス扨モ又松枝タケハ不慈無情ナル継母ガ為メ遂ニ戸外ニ衝出セラレテマタ奈何トモ為スコト能ハズ(明治文学全集2, p380)

上の例は「世路日記」の例で、文章の冒頭に現われる形である。近世や近代の文学作品の本文中には、実に多くの話題転換語がある。また、話題転換語が文章の冒頭に現われるジャンルは、近世の通俗和訳本、読本、三木愛花の漢文小説、明治初期の諸文学である。

ともあれ、近世や近代の日本文学には、「章回」という中国俗文学体裁を取入れているものが多かった。また、二行の小題名のような「回目」(目次)があり、「章回」の内容を暗示する形まで受入れられていた。さらに、文章の冒頭に「話説・却説」のような話題転換語まで使用する体裁になっているものもあり、近世や近代

_____(2006b)「近世・近代における「話説」と「説話」」日語日文学研究, 第56輯1巻、韓国日語日文学会、pp.279-302.

_____(2006c)「日本における『閑話休題』とその周辺」『日本語文学』第29輯、韓国日本語文学会、pp.21-45.

_____(2008b)「日本の近世・近代における『再説』と『且説』」『日本語文学』第37輯、韓国日本語文学会、pp.41-60.

교보문고 KYOBO Book Centre

(特に明治初期)の文学は、中国俗文学の影響を受けていたのではないかと思う。このような中国俗文学の体裁による影響は文章の末尾にもみられるので、章を変えて説明しよう。

3. 物語の「結びの常套語」

語り手の手法とは、「はじめに」で述べたように、大木がいう「中国白話小説は、講釈師が物語の語り手になっており、その語り手が作品の中に直接顔を出す場面があること」を指す。大木は、山東京伝の『忠臣水滸伝』の例を挙げているが、『英草紙』『繁野話』『雨月物語』には現われていないとしている。つまり、聞き手への配慮が初期読本には現われていないということになる。語り手の手法の一つに、各「章回」の最後の部分に語り手が登場し、次回の話を予告するような、または話が続くというような文で終える部分がある。筆者はこれに注目したいのだが、どのような形を指すのかを「四大奇書」と『紅楼夢』の例により示してみよう。

三国志』畢竟董卓性命如何、且聴下文分解。(第一回)
西遊記』畢竟不知向後修些甚麼道果、且聴下回分解。(第一回)
水滸伝』畢竟如何縁故、且聴下回分解。(第一回)
金瓶梅』畢竟不知未来如何、且聴下回分解。(第一回)
紅楼夢』不知有何禍事、且聴下回分解。(第一回)

大部分は「畢竟」という語を伴うが、『紅楼夢』には用いられていない。また、『紅楼夢』には「且聴下回分解」も多いが、「且看下回分解」も多用されている。『三国志』には、「且聴下回分解」を「且聴下文分解」として用いる場合が多い。また、『金瓶梅』と『紅楼夢』には「不知」を「未知」にしている箇所も多い。微妙に異なる点はあるが、「章回」の末尾に「畢竟」とか「且聴下回分解」を用いていることが分かった。これについての正確な用語は見つからないが、「且聴下回分解」について幾つかの辞書に紹介されている。

교보문고 KYOBO Book Centre

忠義水滸伝解,（宝暦7年）

且聴（チエテリン）ニ下回分解（ヒヤアオイフンキアイ）ー　委細ノコトハ次ノ段ニイリワケガアルホドニ次ヲ聞テ合点セヨト云コト也

水滸伝字彙外集,「水滸読格」(刊行年刊未詳、写本)

畢竟　ツマルトコロ。ドドノツマリ。ヲンヅマリ。

且聴下回分解　先ツ下回ノ分ガイヲキケ。マヅ次ノ段ニトキワクルヲキケ。ソワ次ノ巻ヲ読得テシラン。

訳通類略,「小説套語」(明治年刊写本)

且聴下回解　又下段ノイリワケヲキキレ

看官聴説　コロウスルヲカタ申コトヲキキナサレ

多くの辞書のうち、三種の辞書にしか出てこない。「水滸伝字彙外集」では「水滸読格」という用語を、「訳通類略」では「小説套語」という用語を用いている。「回」のところでも「小説套語」という用語を紹介したが、「読格」とか「套語」から感じられるのは、「水滸伝」とか「小説」に見られる常套的な言葉だということである。それで、ここでは「且聴下回分解」を「結びの常套語」と呼びたい。これらには「話説」「再説」「却説」のような話題転換語も紹介されているし、「畢竟」とか「看官」などの語もある。なお、「訳通類略」には「且聴下回解」とあり「分」の字が抜けている。

ともあれ、中国俗文学(特に小説類)では、その「章回」を結ぶ際にも常套的な結び方をしているのである。はたして、こういう用語と似たような形式が日本にも伝えられたのかを見てみよう。まず、通俗和訳本における例である。

通俗平妖伝,（平安本維芳訳、享和二年）

～生死（セウシ）ヲシラント欲（ホツ）セバ且聴（カツキケ）ニ下回分解（カクハイブンカイヲ）ー（巻之三）

畢竟（ヒツキヤウ）蛋子和尚天書（テンシヨ）ヲ求（モトム）ヤ否（イナヤ）且聴（カツキケ）ニ下回分解（カクハイノブンカイヲ）ー（巻之九）

「通俗水滸伝」「通俗西遊記」など、多数の通俗和訳本があるが、「且聴下回分解」の例がほとんど見あたらない。「通俗平妖伝」にのみ2例ある。「畢竟」まであり、中国俗文学のような「結びの常套語」の体裁を残している。ただし、とても例が少ないことから、通俗和訳本ではまだ一般化していないことが分かる。

교보문고 KYOBO Book Centre

一方、日本人作白話小説には、以下のような例が見られる。

演義狭妓伝（烏有道人、刊行年刊未詳）

驚ニ動了幾千人ニ不レ知可淑如何結局、且聴ニ下回分解ニ（第一回）

貪花劇語（煩要菴戯撰、成立年代未詳、安永ごろ）

夫婦人一同回ニ家裡ニ去。未レ聴ニ下回分解ニ。

国朝記事（樊世輔、寛政6年）

必竟～另有ニ下回分解ニ（10ノ下段）1例

北里懲毖録（大堤道凹居士著、臭穢道人訳、明和5年?）

読ニ這回小説ニ。看官請祈　細　看。（第一回）

基本的に、日本人作白話小説は短編のものが多い。「演義狭妓伝」「北里懲毖録」は二回からなっているし、「貪花劇語」は一巻からなっている。「国朝記事」は、「回」の構成ではなく比較的長い文になっている。このうち、中国俗文学通りの「且聴下回分解」になっている例は「演義狭妓伝」にあるが、その他は「且聴」が省かれている。また、「北里懲毖録」は、他の指標である「看官」の例で結んでいることも特徴である。「訳通類略」で見たように、「看官」も「小説套語」で結びの役割をしている。「貪花劇語」の場合は、一巻の構成でその後の話の展開がないのであるが、「未レ聴ニ下回分解ニ」のように「且」の代りに「未」を用いていることも特異である。

長篇の「太平記演義」（岡島冠山、享保4）の場合は、多用されている。

不知後事如何、且聴下回分解（第一回）5例

不知後話如何、且聴下回分解（第三回）

未知頼禅僧正視之、説甚話、且聴下回分解（第四回）

不知後事怎様、且聴下回分解（第五回）

不知後事怎生？且聴下回分解（第二十一回）

不知後来如何、且聴下回分解（第六回）

不知後事若何？且聴下回分解（第九回）4例

교보문고 KYOBO Book Centre

不知如何入城？且聴下回分解(第十回)
還生怎生？且聴下回分解(第十一回)
不知怎生得脱？且聴下回分解(第十五回)
還是如何？且聴下回分解(第十六回)
不知此去勝負若何？且聴下回分解(第十八回)
且聴下回分解(第二十回)
公網此去不知怎生攻城？且聴下回分解(第二十二回)
不知前帝如何逃脱？且聴下回分解(第二十三回)
不知如何廝戦？且聴下回分解(第二十四回)
未知陶山、河野如何廝戦？且聴下回分解(第二十五回)
未知後事若何？且聴下回分解(第二十六回)2例
未知此一戦勝敗若何？且聴下回分解(第二十八回)
未知遣誰去？且聴下回分解(第二十九回)

「太平記演義」の場合は30回構成の大部分に現われるが、「不知後事如何、且聴下回分解」が基本になっている。「不知後事如何、且聴下回分解」は、「金瓶梅」の「結びの常套語」と似ているところが多い。「金瓶梅」には、「且聴下回分解」の前の部分に「畢竟不知後事如何」、「畢竟不知後来如何」、「畢竟未知後事如何」、「畢竟未知後事来如何」が比較的多用されている。「太平記演義」には「畢竟」の例はないが、他の資料に比べ「結びの常套語」は「金瓶梅」の影響を受けた可能性が高い。それから、大木の論文で指摘された、筆者未見の「忠臣水滸伝」(山東京伝、寛政11年)にも例が見られることから、日本人作白話文学には比較的広まっていたといえよう。

次は読本の世界をみよう。

八犬伝」(岩波文庫本、第1冊、2冊、10冊本を調べた)
又後々の巻にていはなん。(第5回)
この巻中もしかることあり、看官(みるひと)よろしく察すべし。(第14回)2
そは又次の巻(まき)にて解(とか)なん。(第18回)
畢竟(ひつきやう)糠助(ぬかすけ)、犬塚信乃(いぬつかしの)に対面して、いかなる事をいひ遣せる。そは次の巻(まき)に解分(ときわく)

교보문고 KYOBO Book Centre

るを見てしらん。(第22回)32回、

これは是何人ぞ、其は次の巻に解分るを見て知らん。(第22回)

畢竟犬坂・犬飼両雄の勝負如何。そは編を嗣ぎ、巻を更て、第四輯の端に解ん。出像を観て余韻を味ふべし。(第30回)

畢竟犬阪胤智が、五十子の城を捕りて、又道節が進退甚麽ぞや。其は又下の回に、解分るを聴ねかし。(第177回)第179回下、

這段は尚長やかにて、亟に尽すべくもあらざれば、又巻を更めて、且本回の局末に、解分るを聴ねかし。(第179回中)

其は又本回の下の編に、解分るを聴ねかし。(第180回中)

看官是等の用意を知るべし。(第180回下)

この段は猶長やかなれば、這勝回も上中下に釐て、又下回に解分るを聴ねかし。(第180勝回上)

是より下は、又本回の下編に、解分るを聴ねかし。(第180勝回中)

椿説弓張月 (岩波文庫本)

畢竟為朝の安危如何。次の巻々を読得て知べし。(第31回)

これは是神歟。人歟。次の巻を読得てしらん。(第50回)

畢竟松寿がここに来つるは。いかなる故ぞ。次の巻を読得てしらん。(第53回)

近世説美少年録 (新編日本古典文学全集83、84、85)

畢竟弘元、小賊等を討捕て、後話甚麽ぞや。そは次の巻に、解分るを聴ねかし。(第2回)

畢竟瀬十郎、阿夏が素生を詳に知りて、又甚麽なる話説かある。そは次の巻に、解分るを聴ねかし。(第4回)第11回、第13回、第16回、第18回、22回、26回、28回、32回、

畢竟～、そは且ここに見したる、出像を観ても、大かたを知りねかし。(第5回)

교보문고 KYOBO Book Centre

畢竟阿夏が這窮阨の、後の話説いかにぞや。そは次の巻に、解分るを聴ねかし。(第7回)24回、

畢竟～、第二輯十一回に、解分るを俟て聴ねかし。(第10回)第20回、29回(畢竟なし)

什麽朱之介は今この箭面を、脱るるや脱れずや。そはこの下に、解分るを聴ねかし。(第23回)

這段は尚長やかなれば、又この次の回にこそ。(第33回)

畢竟～、開は下回にこそ。(第37回)

開は又下の回に、解分るを聴ねかし。(第34回)38回、

開は又下回にこそ。(第34回)

この段～。又巻を更て下回に、解分るを聴ねかし。(第36回)

この段奚に尽しがたかり。又下の回に、解分るを聴ねかし。(第41回)43回、46回、52回

此は是何人ぞや、開は下回に、解分るを聴ねかし。(第42回)55回、56回

言いまだ訖らずして、又巻を続ぐに至れり。自余は下回に解なん。(第44回)48回

又巻を更て、且下回に、解分るを聴ねかし。(第45回)49回、50回、51回、57回

畢竟～、後の話説甚麽ぞや、開は又巻を更て、且下回に、解分るを聴ねかし。(第53回)58回、60回

畢竟～、後の話説甚麽ぞや、開は下回に、解分るを聴ねかし。(第59回)

是より後は、亦下回に解なん。看官先右の綏像を閲せば、其大概を知らんかし。(第54回)

馬琴の代表的な作品である『八犬伝』や『近世説美少年録』に特に多く用いられている。「回」の全てに現われるわけではないが、かなり用いられている。「結びの常套語」は、その形も多様である。基本的には、「且」のない「聴下回分解」を読み

교보문고 KYOBO Book Centre

下した「下の回を解分る」になっている。「且」の代りに「又、そは、そは又」などと共起していて、若干変形した形で用いられている。また、大きい単位である「輯」や「編」が変っても「回」の代りに用いているし、「椿説弓張月」には「次巻」(全部で3例)と共に「読得て知るべし」のように、全く変形した形で用いる例もあった。

「結びの常套語」は、中国俗文学で見たような「且聴下回分解」を単独で用いる場合もあるが、「畢竟」を伴う場合が多い。馬琴の作品は「畢竟」が基本になっているが、単独で用いられる場合と「看官」や「這段」のような指標を伴う場合もあるので、やはり多様性がみられる。このように、馬琴の読本にも「結びの常套語」がよく用いられていることが分かった。

「繁昌記」のような「漢文戯作」には、「結びの常套語」が見られない。それは、小説と違って一つの作品に色々の話題があって、その話題は一回で終ってしまうからである。つまり、続き物ではなく、そのあとの話は全く別のものになるので、「結びの常套語」は必要ではなくなるのである。但し、漢文(変体漢文)で書かれても、小説のようになっているものには、「結びの常套語」が見られる。代表的な作家に三木愛花がいる。

情天比翼縁

畢竟老婆将テ=甚麼手段ヲ一成=就ス此件好事ヲ一且ツ聴ケ=下回分解ヲ一。(第一回)7回

畢竟翠郎這夜遇ワヤ=香玉ニ一麼ヤ且聴ケ=下回分解ヲ一。(第3回)5回、9回

畢竟香玉性命甚麼シ且ツ聴ケ=下回分解ヲ一。(第6回)

畢竟香玉之踪跡甚麼シ待テ=下回ヲ一便チ可シ知ル。(第8回)

新橋八景佳話

畢竟這ノ少年甚麼シ人氏ゾ。且ツ聴ケ=下回分解ヲ一。(第1回)

畢竟也タ有ル=甚麼ノ話説。且ツ聴ケ=下回分解ヲ一。(第2回)

畢竟後話甚麼シ。且ツ聴ケ=下回分解ヲ一。(第3回)

畢竟後話甚麼シ。且ツ聴ケ=下回説キ出スヲ一。(第3回)

교보문고 KYOBO Book Centre

畢竟清郷小紅再逢甚麽。待ニ下回分解一。便可レ知。(第5回)

不レ知清郷果然帰来麽。且听ニ下回分解一。(第7回)

三木愛花の「情天比翼縁」と「新橋八景佳話」は、中国俗文学の形を忠実に反映している。「畢竟」を冒頭において、「且听ニ下回分解一」と結んでいる。「听」の字は「聴」の簡体字であるが、この「听」を多用している。「不知」もあり、「待ニ下回分解一。便可レ知。」のように和文的要素も見られる。徳田武(2005)に、三木愛花は「「西廂記」や「通俗金翹伝」の如き才子佳人の数奇な運命譚を、明治の御代に再現しようとしたのであった」[9]と述べられていることから、元来、三木は中国俗文学に関心を寄せていたことが分かる。なお漢文小説の「本朝虞初新誌」(明治16年)、「譚海」(明治17年)、「夜窓鬼談」(明治26年)などには、「結びの常套語」が用いられていない。

では、最後に明治期の文学作品にはどのように反映されているのかを見てみよう。「結びの常套語」は、主に明治20年代以前のものに集中している。「章回」小説であるから「結びの常套語」を必ず用いるというわけではないが、やはり翻訳小説、政治小説、講談類に多く現われている。ここでは、このようなジャンルを問わず、考察することにする。まず、典型的な「且聴下回分解」が現われているものを見よう。

畢竟「マーチン」の生死什麽且らく下回の分解を聴け。(白露革命外伝自由廸征夫, 第2回)

畢竟～下回に分解るを聴ねかし。(白露革命外伝自由廸征夫, 第5回)

必竟～且ク下回ノ分解ヲ読テ知レ(惨風悲雨世路日記, 第3回、明治17年)

其は且つ次回の分教を听くべし。(鬼啾啾, 第4回)

9) 徳田武(2005)「新日本古典文学大系 明治編3 漢文小説集」の「情天比翼縁」の紹介欄参照。

교보문고 KYOBO Book Centre

中国俗文学に用いられている典型的な「結びの常套語」は、「且聴下回分解」である。さらに「畢竟」を伴う場合が多い。明治期の日本文学には、典型的な形はそれほど多くない。「畢竟～且聴下回分解」の形式は、「白露革命外伝自由廸征夫」や「惨風悲雨世路日記」に見られる。「鬼啾啾」には、「分解」の代わりに「分教」を用いている特殊な例もある。

「畢竟」の他には、「必竟」「看官」「看客」を伴う場合も多い。以下、明治期に現われている例を提示してみよう。

畢竟マルツラバーストフロレンスノ恋情如何ハ看官宜シク察ス可シ。（花柳春話，第54章）

畢竟此の娘は誰にして彼の壮丁は如何なる者ぞ下回を読み見て知りぬ。（白露革命外伝自由廸征夫，第1回、明治17年）

畢竟此の声かけしは如何なる人か、且つ次回の出るを待て。（「自由の凱歌」第23回）

畢竟～且つ次回の分教を俟て。（自由の凱歌，第44回）

畢竟～。其は且つ次回をもて緩々と説き出さん。（汗血千里の駒，第9回）

畢竟此結局如何なるや（嶋田一朗梅雨日記，明治12年、明文全2、p75）

畢竟～次回の発兌を待て知るべし（蝶島紫山裙模様，第16回）

畢竟～次回に弁じます（天保六花撰，第12回）

必竟～看官宜シク次巻ヲ読テ知ルベキナリ。（花柳春話，第49章）

必竟～如何なる議論を吐くや第三回に於て詳にすべし（巷説二葉松，第2駒、明治17年）

必竟御達ノ趣キ如何ハ且ク次回ヲ読テ知ル可シ（惨風悲雨世路日記，第4回）

必竟～看官且ク後回ニ説クヲ聴ケ（惨風悲雨世路日記，第14回）

必竟～且ク後回ニ説クヲ聴ケ（惨風悲雨世路日記，第25回、26回）

必竟～且ク次回ノ解ヲ聴ケ（惨風悲雨世路日記，第36回）

「漢語大詞典」には「必竟」の欄があり、「終究、到底。必、通"畢"」となっている

교보문고 KYOBO Book Centre

ことから、「畢竟」と同義であることが分かる。「畢竟」も注意を喚起してまとめるような役割をしているが、そこに「結びの常套語」がきている。ただ、「且聴下回分解」からは少々変形された形で現れる。「看官」も同様のものといえる。

看官宜シク下文ノ分解ヲ読テ知ル可シ。（花柳春話, 第51章）

看官請フ次章ノ至ルヲ待テ。（花柳春話, 第59章）

看官ノ推察アランコトヲ請フ。（花柳春話, 第48章、明治11年）

看官且つ次号の分解を聞ねかし（汗血千里の駒, 第2回）

看官願くは彼此相参照せられんことを。（自由の凱歌, 第1回、明治15年）

看官大概猜し給はん。（自由の凱歌, 第3回）看官宜しく察し給へ9回。看官試みに猜し給へ49回

看官心に自づと分りつらん。猶又次回の紙上に委しく。（自由の凱歌, 第52回）

看者其の心にて読み玉へかし。（自由艶舌女文章, 第35回）

看客応報の全きは次編を読みて知らせたまへ。（高橋阿伝夜叉譚, 第2回、明治12年）

看客宜しく察し給へ（嶋田一朗梅雨日記, 明文全2、p90)p93。

編者曰～看客よろしく察したまへ（巷説児手柏, 明治12年、第4回）

什麽此芸妓は何者ぞ看客戯れに当て見ためへ（浅尾よし江の履歴, 明文全2、p331）

「看官」を代表として「看者」「看客」も見られるが、やはり語り手が介入する形で、聞き手(読み手)を意識している。「畢竟」と同様、その後ろには次の話があることを暗示しているのである。ここでも典型的な「且聴下回分解」からは遠ざかっていて、以前にはなかった新しい形式である。今度は、「畢竟」や「看官」はないが、「次回」という指標を持っている例である。

開は次の回に説くを見て知りねかし。（絵本鵞瓈噺児回島記, 第5回、明治13年）

교보문고 KYOBO Book Centre

将(はた)又(また)従(した)がふか開(そ)は又(また)次回(じくわい)の分解(ぶんかい)を聴(き)け。（白露革命外伝自由廼征夫, 第3回）

次号の発兌(はつだ)を待(まち)ねかし。（西の洋血潮の暴風, 第2章、明治15年）

エヘン何(いか)なる談話をかなす。謹んで次号の分解(ぶんかい)を延頸(まち)ね。（西の洋血潮の暴風, 第7章）

忽ち其身の上に一つの幸なき事を生じ来れる話しは、例の通り次回に委しく。（自由の凱歌, 第2回）

又追ひ追ひ革命の期に迫る物語りは、余白なきゆへ次回の分教(ときわけ)に譲る。（自由の凱歌, 第7回）

如何なる縡(こと)を説き出すか、次回を読んで知り給ひね。（自由の凱歌, 第16回）例の次回を読み給へ53回）

其翌年(よくとし)の初(はじめ)恐ろしきことの起りし話しは、又次回。（自由の凱歌, 第18回）

再びギルベルトに打向ひ如何なる事を説き出すか、次回の紙上を待ち給へ。（自由の凱歌, 第42回）

其れには深き仔細あり、追ひ追ひ後回に説き分けなん。（鬼啾啾, 第1回、明治17年）7回、

例(れい)の次号(じごう)もて一人(ひとり)の男(おとこ)の誰(たれ)なるをも説(と)き分(わ)くべし（汗血千里の駒, 第1回、明治16年）

暫(しばら)く次号(じごう)に譲(ゆ)づるとせん（汗血千里の駒, 第5回）

次号(じごう)よりして説(と)き出(い)づべし（汗血千里の駒, 第7回）

而して其分解は作者且仮(か)り以て次号の冒頭(はしがき)となすべき也。（汗血千里の駒 第18回）

駒を急がせ山陽道を只一鞭に馳せ上る、後の話頭(はなし)は次号にゆづりぬ。（汗血千里の駒, 第16回）

後(のち)の話頭(はなし)はゆるゆる次号に説き出べし。（汗血千里の駒, 第32回）

語り出せる過去の長物語は、次回より続々掲げ記すべし。（自由艶舌女文章, 第11回、明治17年）

さて～如何なる奇談かある。其は次回を待つて知り玉へかし。（自由艶舌女文章, 第26回）

そもこの巡礼の女はいかなるものにや、次の回にて明らかなるべし。（自由艶舌

교보문고 KYOBO Book Centre

女文章, 第28回)32回

～如何なる人にてあるやらん次回に至りて詳細に知るべし(「巷説児手柏 第11回)

～何をか云ふ次回に於て分解すべし(蝶島紫山裙模様, 明治16年、第4回)

其手続きは次回に説べし(蝶島紫山裙模様, 第10回) 次回18回

～如何なる答をなすやらん次回に於て説明すを看よ(蝶島紫山裙模様, 第13回)

～毎回紙上に限あれば次号に譲りて稿を止めつ(蝶島紫山裙模様, 第25回)

～詳細き談は次回に譲る(蝶島紫山裙模様, 第29回)

藩主が美人の画を品評する処は絵様に視して本文は次回に譲る(巷説二葉松, 第6駒)

此場の段落は行数の都合に依て次回において説む(巷説二葉松, 第9駒)

仔細は例の次号に記さん10駒。此場の段落は次駒に記さん12駒。後の話は次号に記さむ33駒。次号に譲る13駒。次駒に記すべし14駒。例の次号に説ん20駒。例の次号に24駒。後の語談は次号に説くべし28駒。29駒。49駒。次回にあり50駒。次駒に説ん52駒。

是レ則チ何人ナルカ且ク次回ヲ読テ知レ(惨風悲雨世路日記, 第16回)

且ク下編ニ説クヲ聴ケ(惨風悲雨世路日記, 第24回)

～長キヲ以ツテ下回ヲ看ルベシ(惨風悲雨世路日記, 第27回)

是より一の騒動を惹起すと云ふ条り、次回に譲ります(天保六花撰, 第3回、明治25年)

～一段は次回に申上ます(天保六花撰, 第4回)

と説き出す一条は何様な事をいふか 次回(天保六花撰, 第5回)

～如何なる答をなすか 次回のお楽しみと致しませう(天保六花撰, 第6回)

開は次回のお楽しみと致しませう(天保六花撰, 第10回)

次回に述べます11回、次回に精しく弁じ上ます13回、18回、

～後終によし江の身に難儀の掛る趣きはまだ長ければ次号に追追(浅尾よし江

교보문고 KYOBO Book Centre

の履歴』明治15年、明文全2、p283)
後の話は次号に説べしp283、4例。又次号にp284。次号にまたp336。後の話説は次号に説を看て知らんp285、3例。後の咄しは次号にまたp287、12例。開は又次号に綴るを看べしp290。開はまた次号に看て知るべしp291、2例。委しくは次号に譲るp292、2例。次号に譲らんp339。開は又次号に説を看るべしp293、3例。此段落は次号にまたp301、3例。此段落は次号に説べしp303、7例。委しくは次号にまたp304、2例。後の咄しは次号を看るべしp313。次号に記さんp319。後の咄しは次号に綴らんp321。次号に委しく説くを看るべしp328、2例。後の話説は次号に説べしp333。後の咄しは次号に説べしp335、4例。後の話は次号に説べしp341。此段落は次号に説くを看て知らんp342、2例。次号に委しく説明さんp343。此段落は次号に譲るp345。次号に説くべしp349。

「次回」が大部分であるが「次号」もかなりある。『巷説二葉松』の場合は「駒」(主に劇にみられる)になっているので、「次駒」という例もあるがあまりない。それから、「章回小説」だからといって全ての「章」や「回」ごとに現れるのではなく、一つの作品にいくつかだけ用いられるのが一般的である。一方、『浅尾よし江の履歴』(ちなみに章回の標識はない)には「次号」の例が多用されているし、形も多様である。

中国俗文学には「下回」が主に用いられているのに対し、明治期の文学作品には「下回」そのものはそう多くない。読本には「次巻」の例もあったが「下回」が主流であったし、日本人作白話文学や漢文小説が中国俗文学の形式を忠実に取り入れている反面、明治期の文学では、典型から離れて自由な形で現れている。勿論、少々変わった形ではあるが、日本文学の流れからすれば、近世以前にはなかったものであるので、中国俗文学の影響であったことは確かであろう。

其(そ)は且つ以下の分解によりて知道せられよ。(『汗血千里の駒』第24回)
その結果を同ふすべきや、そは後ちに至りて自から分解の時あるべし。(『稚児桜』第8回、明治20年)
是より以下は話頭漸(やう)やく初(はじめ)に復(かへ)ると知りたまへ。(『鬼啾啾』第6回)
乍麼(そも)この女は如何なるものにや、読者(みなさま)の御判断を願ひ申すにこそ。(『自由艶舌女文章』第11回)

교보문고 KYOBO Book Centre

知らず国野の囹圄に下りし後、復た如何なる奇談かある。(雪中梅, 上編第5回)

読者之を諒せよ。(雪中梅, 上編第6回)

此の才子美人一たび相逢ふて後、又何の奇談かある。請ふ下編の出づるを俟て之を知れ。(雪中梅, 上編第7回)

～、中編に至て之を説き出すべし。(花間鶯, 上編第9回)

～此場の結局いかにぞや次編をいよいよ大尾とすれば不日の発兌を待て知り玉へ(嶋田一朗梅雨日記, 明文全2、p89)

～其挨拶如何にや四編の初めに説き分くべし(沢村田之助曙草紙, 明治13年、明文全2、p116)

偖は心が変つたかと怒を含む一段はまだ長ければ明日委しく(金之助の話説, 明治11年、明文全 2、p132)133、135、明日また、明後日、多数

第二十一回に編嗣を見て知らん(蝶島紫山裙模様, 第20回)

最後に、以上取り上げたもの以外にも「結びの常套語」の役割を果たすものがある。「分解」「読者」「中編」「下編」「明日」など、具体的な指標をもって話の内容を案内するようなものである。

中国俗文学における「結びの常套語」は、「畢竟～且聴下回分解」である。日本でも踏襲し、特に明治期の文学には、実に多様な形で現れている。このように、中国俗文学の形式が近世や近代の日本文学に投影されていることがわかる。

4. おわりに

近世には、鎖国政策のなかでオランダと清国との貿易は行われていた。特に清国との貿易は、中国俗文学の輸入もあり、日本人に人気を博していた。中国俗文学が日本の文学にも大きな影響を及ぼしていることは周知の通りである。

本稿では、日本の文学にそのまま取り入れられた中国俗文学の形式について考察した。特に、小説の始まりと終りの部分に注目した。中国俗文学の大きな特徴は「章回小説」であることだ。勿論、日本には中世までは中国俗文学のよう

교보문고 KYOBO Book Centre

な「章回小説」はなかった。中国では「巻」のものもあるが、時代の流れにより「回」や「章」になっているものが増えていく。さらに「回目」(目次)のように、二行からなる目次が流行する。こういうスタイルが日本にも伝えられ、読本、通俗和訳本、日本人作白話文、漢文戯作の一部、明治期の文学にも影響を及ぼしている。「回」そのものは、言文一致の創始期の作品にも現われているが、二行の「回目」は用いられなくなる。ちなみに、「章回」の話の導入部に「話説・却説・閑話休題」のような話題転換語も多数用いられ、中国俗文学の体裁を帯びている作品が多く見られる。

中国俗文学における「章回」の終りの部分には「結びの常套語」が用いられる。これは、一般的には「畢竟」を伴いつつ「且聴下回分解」をもって結ぶという形式である。「且つ下回の分解を聴け」の意味であるが、日本の文学にもそのまま受入れられている。近世の読本、極一部の通俗和訳本、日本人作白話文、明治期の漢文小説の一部にも用いられているが、特に、明治期の翻訳・政治・講談などの文学作品には多数用いられている。明治期の場合は20年代以前の作品に集中していて、「且聴下回分解」のような原形を保っているものもあれば、「看官」「次回」「次巻」「次編」のような指標を用いる場合も多い。

このように、中国俗文学の形式をそのまま日本文学に導入している作品が多いことから、中国俗文学が近世や近代の日本文学に意外というほど影響を及ぼしていることが分かった。しかし、日本における「章回」小説の「回目」や「結びの常套語」は、言文一致の創始期である明治20年代以後は特殊な資料以外には用いられなくなり、一時的な流行であったことがわかる。これからも、どのような中国語が日本文学に浸透し活用されていたのかを考察していきたい。

参考文献

石崎又造(1967)『近世日本に於ける支那俗語文学史』清水弘文堂、全.
香坂順一(1983)『白話語彙の研究』光生舘、p.438.
中村幸彦(1984)「水滸伝と近世文学」『中村幸彦著作集　第7巻、中央公論社、pp.214-268.
徳田　武(1977)「読本と中国白話小説」『江戸文学と中国』毎日新聞社、pp.55-76.
大木康(2009)「馮夢竜『三言』から上田秋成『雨月物語』へ―語り物と読み物をめぐって」『文

교보문고 KYOBO Book Centre

学, 第10 巻1号、岩波書店、pp.151-156.
江蘇省社会科学院(1990)「中国通俗小説総目提要, 中国文聯出版公社、全.
羅工洙(2005)「日本における中国俗語的話題転換語「却説」」「日本語文学, 第26輯、韓国日本語文学会、pp.41-66.
_____(2006a)「日本における中国語指示代名詞「這辺・那辺」」「日本語学研究, 第17輯、韓国日本語学会、pp.9-32.
_____(2006b)「近世・近代における「話説」と「説話」」「日語日文学研究, 第56輯 1巻、韓国日語日文学会、pp.279-302.
_____(2006c)「日本における「閑話休題」とその周辺」「日本語文学, 第29輯、韓国日本語文学会、pp.21-45.
_____(2007)「日本における中国語指示代名詞「這里・那里」」「東亜人文学, 第11輯、東亜人文学会、p.141-177.
_____(2008a)「日本における中国語の疑問代名詞「甚麽・什麽」について」「日本近代学研究, 第21輯、韓国日本近代学会、pp.5-35.
_____(2008b)「日本の近世・近代における「再説」と「且説」」「日本語文学, 第37輯、韓国日本語文学会、pp.41-60.

❖ 투고일 : 2010. 6. 30.
❖ 심사일 : 2010. 7. 14.
❖ 심사완료일 : 2010. 8. 2.

교보문고 KYOBO Book Centre